

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.25

(2015年3月号) ◆

20世紀メディア研究所の公開研究会も地道に会を重ね、2月例会で90回を数えることとなりました。記念すべき第100回研究会も視野に入ってまいりました。また、本年は戦後70周年の年でもあります。戦争、占領期、植民地などを重要なキーワードにしております。20世紀メディアの共同研究においては、昨今の政治状況をにらみつつ、節目の時期を迎えます。今後とも研究所の活動に一層のご支援たまわりたくよろしくお願い申し上げます。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第90回20世紀メディア研究会】(2月28日(土)午後2時半～5時半)

・北村 匡平 (東京大学大学院修士課程)：占領期の映画における〈青春〉の表象とスター原節子の分析——黒澤明『わが青春に悔なし』の受容をめぐって

ゾルゲ事件、滝川事件などをモデルに構想された黒澤明『わが青春に悔なし』冒頭の原節子と学生群像のシーケンス分析を軸に占領期映画における「青春」表象の考察が試みられた。

・高光 佳絵 (千葉大学大学院人文社会科学研究所助教)：岩永裕吉と太平洋問題調査会 (IPR)

太平洋問題調査会が、戦前戦中における国際関係にどのように関わったか、とりわけ満洲国承認時の動向について、岩永裕吉をキーパーソンにして考察された。岩永 (国際通信社を経て同盟通信社初代社長) と英国に本拠を置くロイター、米国に本拠を置く AP などの通信社の人脈が IPR において果たした役割について分析された。

・白山 眞理 (日本カメラ博物館)：渡辺淳旧蔵資料にみる山端祥玉の〈報道写真〉
日本の芸術写真を代表する写真家の一人である渡辺淳の旧蔵資料から、渡辺とシンガポールで親交を結び、生涯にわたり関係の深かったサン商会 (ジーチーサン商会、山端写真科学研究所、ジーチーサンと改称) 社長の山端祥玉の報道写真に関わる軌跡をたどった。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。

<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の 20 世紀メディア研究会は 3 月 28 日(土)で、安野一之氏、宮杉浩泰氏、加藤哲郎氏
がご報告の予定です。その後は、4 月 25 日(土)、5 月 30 日(土)、6 月 27 日(土)を予
定しております。なお、NPO インテリジェンス研究所による諜報研究会は 5 月 16 日(土)
に開催予定です。5 月例会以降のご報告者を募集中です。御希望の方は、20 世紀メディア
研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

牧義之『伏字の文化史 検閲・文学・出版』（森話社）。牧氏はかねて内務省検閲を中心
とする検閲研究の一端を 20 世紀メディア研究会や「Intelligence」で示していただきました
が、この度、「伏字」をキーワードに集大成を上梓されました。四方田犬彦『よみがえる夢
野久作《東京人の墮落時代》を読む』（弦書房）。北九州を拠点に気を吐く地方出版社弦書
房の FUKUOKA ブックレット 8。夢野久作「東京人の墮落時代」は、地方紙記者時代の夢
野による関東大震災後の東京ルポルタージュである。夢野久作は杉山茂丸の息子でもあり、
1920 年代 30 年代の日本のモダニズムとナショナリズムの交差する領域で幾多の問題
作を著した。当時のナショナリズムが持ち得た（大）アジアへの眼差しは、現在失われて
しまったが。

【コラム：ドナルド・キーン・センター柏崎】

ドナルド・キーン・センター柏崎から、2015 年度特別企画展「太平洋戦争とドナルド・
キーン」のお誘いをちょうだいした。1941 年の日米開戦、1942 年 2 月から 6 月バークレー
米海軍日本語学校入校、同 6 月中旬米海軍日本語学校のボルダー移転、語学士官として 1943
年 2 月から 4 月にかけてパールハーバーへ、同 5 月から 8 月、アッツ・キスカ島、9 月ホノ
ルル陸海軍共同翻訳局、そして 1945 年 3 月沖縄従軍、グアムにて日本のポツダム宣言受諾
を聴く、1945 年 9 月から 11 月までは青島において日本軍の戦争犯罪者調査と、知らぬ者
のない日本研究の泰斗の知られざる原点とその足跡が展示されるらしい。ドナルド・キ
ーン先生には、『検閲・メディア・文学 江戸から戦後まで』（新曜社）に結実した早稲田大
学とコロンビア大学の共同研究の末席に連なる機会に恵まれた折、「プランゲ文庫研究は私
が最も関心を寄せている領域です」と励ましのお言葉をちょうだいした思い出がある。戦
後 70 周年、まだ名付けられぬ戦争状態への途上にあるかのような現在、見逃すことのでき
ない企画展になるだろうと期待している。

[3月 10 日付文責：川崎賢子]